

●WORLD CONFIDENTIAL●WORLD CONFIDENTIAL

中国進出企業はどうなる！ 知られざる『鄧小平体制の危機』

第230回 新聞では分からない最新中国事情

その1

シェワルナゼ・ソ連外相が来日し、八年ぶりに日ソ外相定期協議が開かれたことで、低迷つづきだった日ソ経済関係に明るさが深いはじめたが、それとは対照的に、いまやめっきり冷え込んでいるのが日中貿易だ。

現に、日本貿易振興会が1月17日に発表した61年の日中貿易見直しによると、対中貿易輸出額は、前年にくらべて二十割減の百億ドル前後となり、四年ぶりに減少するとともに、中国政府の輸入抑制の継続で、この減少は62年までつづくという。

み方

考えてみれば、中国では輸入抑制に加えて、昨年9月以降、反

日デモが繰り返されていることもあって、わが国の経済界では、中国市場「バラ色論」がようやく姿を消しつつある。それにしても、中国は、なぜ輸入抑制策をとるようになったのか。なぜ、反日デモが繰り返されるのか。

最近、『10年後の中国』（第一企画出版）と題する本を著わした東京外国語大学教授・中嶋嶺雄氏をゲストに迎えて、新聞では分からない中国の内部事情について聞いてみた。



ゲスト 中嶋嶺雄 (東京外語大教授)

政策よりも党内路線対立が優先

竹村 中国は、ワーストと輸入をふやしたかと思うと、今度のようにバツと止めたりする。政策のブレが非常に大きい。

中嶋 おっしゃるように、しょっちゅう政策が変わりますね。これを、僕らはオシレーションと呼んでいるんです。政治的、社会的循環ですね。だいたい、五、六年ごとにオシレーションが起こっている



その原因としては、まず政権そのものが不安定だということ

があげられますね。それから、指導者が思いつきのひとつ政策をやるとしますね。ところが、なにしろ官僚機構が整備されていないから、その政策が社会的になかなかビルトインされない。ですから、行き詰まるとすぐ政策を変える。

竹村 それは、対外経済政策についていえるわけですか。

中嶋 そうです。80年代初頭からの開放政策があちこちで破綻してきたので、今度は引き締めよう。つまり、放から収めよう。その循環局面に入ったにもかかわらず、それに気づかないで日本企業がワーストと拡大基調で中国市場へ出ていったから、消化不良を起こした。

竹村 輸入抑制は、国内経済と関連があるんですか。

中嶋 ええ、10年後の中国の中にも書いたことですが、中国は、農民のやる気を起こすため、農産物の統一買付価格を倍くらい引き上げた。だけど、そうすると国家財政が赤字になる。そのとき、やることはひとつ。通貨をべらぼうに発行することです。一昨年は百七十億元で、国家財政の赤字以上に通貨を発行した。ですから、すごいインフレなんです。十二、三割のインフレ率といいますが、北京ではものによって五十割といえます。

竹村 社会主義国は、物価が上がらないことを自慢にしていたはずだけど。

中嶋 そうです。同時に、共産圏は、これまで外債がなかったわけですから、つまり、対外債務がないというのが中国の誇りだった。だけど、この間あちこちから借りまくった。そのため外債が急激に不足してきた。だから、昨年4月1日から外貨管理処罰

●WORLD CONFIDENTIAL●WORLD CONFIDENTIAL

竹村健一 『世界の読』



実施細則とい
う厳格な規定
が施行されて
いる。ところが、
そこに気が
づかずに出て
いったわけ
ですね。

竹村 しかし
そんなに政策
をコロコロ変
えて、外国か
ら信用を失う
と彼らは思わ
ないんですか
ね。

中嶋 彼ら

にとつては外国の信用というこ
とよりも、国内政治、路線対立
のほうがよほど深刻なんです。
中国には、常にふたつの路線が
あります。毛沢東時代も、華国
鋒時代も、鄧小平時代もそう
です。

鄧・陳対立を示す 『人民日報』社説

竹村 鄧小平時代というとい
まですわな。

中嶋 そうです。現在、同じ
旧実権派の中から出た陳雲と
鄧小平のふたつの派があつて
……。

竹村 陳雲は、鄧小平路線に反
対しているんですね。

中嶋 ええ。陳雲は、昨年9月
の全国代表会議で、**「万元戸、
(年収が一万元をこえる富農)**
を頭から批判して、**「よろこん
でいるのは何事か、と述べてい
ます。あくまで計画経済でやら
なければいけないというわけ
です。そういうことが、最近の中
国における深圳経済特別区の見
直しとか、あらゆる問題すべて
に響いているんです。」**

竹村 僕は、こういいたいんで
すよ。中国の外貨保有高は、百
五十億ぐらいでしよう。十億
の人口で割つたら、ひとり当た
り十五ぐらです。ひとり十五
ぐらだったら、ラジオを一台買え
ばそれで終わりですよ。

中嶋 そう。にもかかわらず、
中国が巨大なマーケットである
かのように錯覚して、日本の企
業は、『人民日報』に大々的に広
告を出してきたりしたんです。

マツダとか、ナショナルとか、
NECとか……。この数年、毎
日のように『人民日報』に出



鄧小平vs陳雲(左)の対立を逆証明した『瞭望』26号の表紙写真



■イラスト/太田宏明

です。「我々の政策
が両極分化を招くな
ら、我々は失敗した
ことになる。もしも
新的資産階級(新し
いブルジョアジー)
を生み出したら、そ
れは我々が邪悪の道
にはいり込んでしま
ったことになる」と
書いてある。

竹村 「人民日報」といえば、
中嶋さんは、昨年6月の
社説の重要性を本の中
でも指摘されていますね。
中嶋 ええ。昨年6月8
日の社説で、これはたい
へん重要な社説です。も
ともと『人民日報』には
月に五、六回しか社説が
載らない。しかも小ぢん
まりと一面の下の方に、
外国の元首が来た時など
に御祝儀みたいな社説が
出るといいます。それが、
久々に一面トップの大々
的な社説で、内容的にも
注目すべきものだったん

ていて、私は以前からこれはや
り過ぎだ、と警告していたん
ですわね。

竹村 万元戸推薦をいうたの
と正反対だ。ということは、鄧
小平路線批判を、党の機関紙が
堂々と書いていることになる。

中嶋 明らかに陳雲路線の台頭
を示しています。「人民日報」
は、力関係によって社長が代わ
るんです。「人民日報」の編集
権を誰がとるかが、常に大きな
問題なんです。しかも、その
「人民日報」が出た直後、陳雲
と鄧小平のふたりが、いかにも
和気あいあいと並んでいる写真
が、7月1日発行の『瞭望』26
号に出ている。これは、少なく
とも路線対立があるからこそ出
したわけで、しかも、鄧小平と
陳雲が同じく力の持っている
ことを示しているんですね。
(つづく)